

# オガサワラカワラヒワの保全に関する島内での取り組み

天谷優里<sup>1</sup>、宮澤りおん<sup>2</sup>、足立祥吾<sup>3</sup>

## Efforts in the Ogasawara Islands for the conservation of the Ogasawara Greenfinch

Yuri AMAGAI<sup>1\*</sup>, Rion MIYAZAWA<sup>2</sup> & Shogo ADACHI<sup>3</sup>

1. 小笠原村立母島中学校（〒100-2211 東京都小笠原村母島字元地）  
Hahajima junior high school, Motochi, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
2. 藤谷農園（〒100-2211 東京都小笠原村母島字元地）  
Fujitani Farm, Motochi, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
3. アイランズケア（〒100-2101 東京都小笠原村母島字静沢）  
Islands Care, Shizukazawa, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.  
\*liliumilktea@gmail.com (author for correspondence)

### 要旨

オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップを受けて、オガサワラカワラヒワの塗り絵を母島の保育園、小中学校で実施した。沖港船客待合所ではオガサワラカワラヒワに関するパネル展示を行った。また、小中学校では、子どもワークショップを実施した。それぞれのイベントを通して、島内外でのオガサワラカワラヒワの認知度や関心を高めることができた。

### キーワード

関心、子どもワークショップ、写真、認知度、塗り絵

#### 1. 沖港船客待合所でのパネル展示

2020年11月6日から2021年1月4日の期間、オガサワラカワラヒワに関するパネル展示「知ってた？今、日本で一番絶滅しそうなお鳥 オガサワラカワラヒワ展」を実施した（図1）。主題はオガサワラカワラヒワの認知度およびその現状についての関心を高めることであった。ターゲットはオガサワラカワラヒワについて知らない・関心の薄い島民や島外の方とした。

内容は7つのコーナーに分けられ、①「塗り絵コーナー」では、島の子どもたちが塗った作品を掲示した（図2,3）。②「写真コーナー」では、オガサワラカワラヒワの生態写真

やそれにまつわる生き物や風景の写真を掲示した（図4）。③「解説コーナー」では、オガサワラカワラヒワの生態や現状についての解説パネルを掲示した（図5）。④「オガサワラカワラヒワ目撃情報MAP」では、目撃情報収集および共有のためにA3大に印刷された母島の白地図を設置した（図6）。⑤「SNS 応援コメント」では、Twitterに寄せられた100件近い応援コメントを掲示した（図7）。⑥「ワークショップたより」では、ワークショップまでのスケジュールや野生動物保護獣医師会が発行したヤンバルクイナ保全についてのニュースレターを掲示した（図8）。⑦「アクションプラン発表」では、ワークショップ内で決定された、各ワーキンググループのアクションプランを掲示した（図8）。

限られた期間・人員・展示スペースの中で多岐にわたる内容を盛り込んだ。沖港船客待合所は母島の玄関口であるため、島内外を問わず様々な人が出入りする。ゆえに、パネル展示は人目に触れる機会も多く、普及の効果が大きかった印象を受けた。



図1. 沖港船客待合所でのパネル展示  
Figure 1. Panel displays at the Oki port passenger lounge



図2. 塗り絵コーナー  
Figure 2. Coloring picture section



図3. 塗り絵掲示コーナー  
Figure 3. Coloring picture section (displayed)



図4. 写真コーナー  
Figure 4. Photo section



図 5. 解説パネル  
Figure 5. Explanation panel



図 6. 目撃情報 MAP  
Figure 6. Map of sighting reports



図 7. Twitter の応援コメント  
Figure 7. Supportive comments on Twitter



図 8. ワークショップたより、アクションプラン発表  
Figure 8. The Workshop news, and presentation of the action plan

## 2. 塗り絵

絵本作家のなるかわしんご氏（大学のゲスト講師を務めたり、自然活動などにも積極的に参加している）に、オガサワラカラヒワの塗り絵の製作を依頼した（図 9, 10）。

この塗り絵は母島の保育園および小中学校に配布され、沖港船客待合所では誰でも自由に塗り絵ができるコーナーが設置され、観光客などの島外の人でも塗り絵に参加できるようにした（図 2）。それぞれが思い思いに彩色し、出来上がった作品は沖港船客待合所にて展示された（図 3）。また、父島では小笠原自然文化研究所が島民に塗り絵を配布した。

塗り絵（図 9, 10）は、2021 年 1 月 12 日に、オガヒワの会ホームページから自由にダウンロードできるようになり、普及の幅が広がった。オガサワラカラヒワを知らない人を減らし、子供から大人までのたくさんの人に興味を持ってもらうことができた。

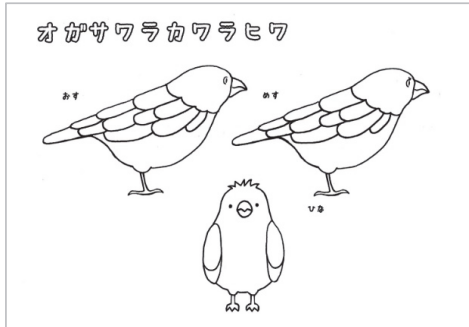


図9. 子ども向け塗り絵原画  
Figure 9. Original coloring picture for children

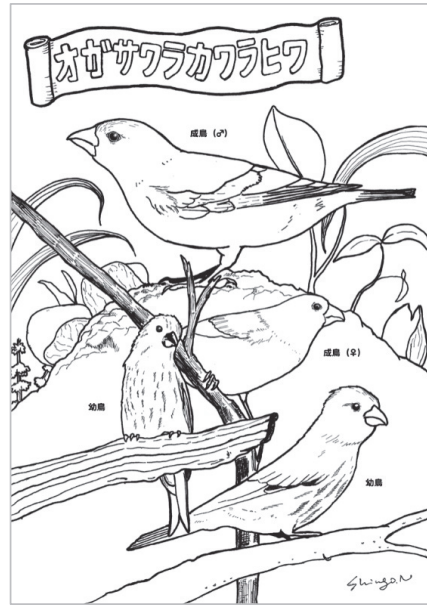


図10. 一般向け塗り絵原画  
Figure10. Original coloring picture for everyone

### 3. 子どもワークショップ

2020年12月20日に小笠原村立母島小中学校にて「子どもワークショップ」が行われた(図11)。全校生徒44名のうち、30名近くの子どもたちが参加し、専門家の説明に耳を傾け、グループワークでは学年を越えて闊達な意見交換が行われた(図12)。

オガサワラカワラヒワの生態や今困っていることを聞いたうえで、子どもたちは4つのグループに分かれて、次の3項目について考えた(図13,14)。それは、①オガサワラカワラヒワの愛称、②オガサワラカワラヒワの宣伝方法、③オガサワラカワラヒワを探す方法である。

①オガサワラカワラヒワの愛称については、アカガシラカラスバトが「アカポップ」と呼ばれているように、皆に親んでもらえる愛称をつけることを目的に考えた。40近くの案が出た中で、子どもたちが投票し、4つの案(「チョモランマくん」、「カルパッチョ」、「オガヒワ」、「グリーンヘッド」)をオガヒワの会に提案した。この4案は、オガサワラカワラヒワ保全計画作りWS本大会での投票候補となった。

②オガサワラカワラヒワの宣伝方法については、島内外にオガサワラカワラヒワの存在をアピールする目的に考えた。グッズ作成、ポスター、パンフレット、村内放送、小笠原テレビ、SNSでの発信などの意見が多く挙げられた。また、オガヒワ杯のスポーツ大会、交通標識、看板、着ぐるみ作成なども挙げられた。

③オガサワラカワラヒワを探す方法については、個体数の非常に少ない鳥であるため、



皆が存在を知るようにするには、どのようにしたらよいかを考えた。探索隊、バードウォッチングの定期的な実施、発信機・レーダー・カメラなどの設置、バジルなどを植えて餌場を増やすこと、情報収集場所（SNS、情報BOX、地図にシールを貼る、証拠写真を撮るなど）をつくることなどが挙げられた。

子どもたちの中でもオガサワラカワラヒワに対する関心が高いことが分かった。保全のために何かできることを見つけて、動き出すきっかけになったと思われる。



図 11. 母島中学校の中庭で実施した子どもワークショップの様子

Figure 11. The workshop for children in the junior high school's courtyard



図 12. グループワークの様子

Figure 12. The group session

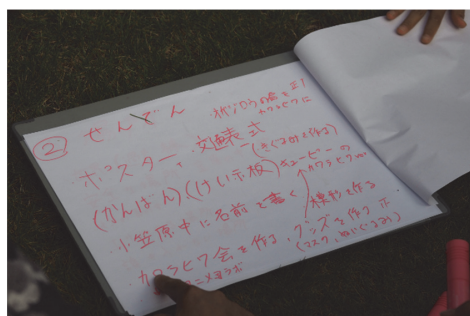


図 13. 意見ボード

Figure 13. The opinion board



図 14. 4 グループの意見ボード

Figure 14. Posting of the four groups' opinion boards

#### 4. オンライン講演会（父島・母島）

小笠原村民に向けて、オガサワラカワラヒワの現状についての情報共有を目的としたオンライン講演会「オガサワラカワラヒワ～日本で最も絶滅の危機にある固有の鳥」が行われた（図 15）。父島島民向けは2020年11月13日に、母島島民向けは2020年11月20日にそれぞれ実施され、島民にその現状が広く周知されることとなった（図 16）。



## 付 録 「沖縄から学ぶヤンバルクイナの保全の現地の取り組み」 質疑応答部分

佐々木（事務局）：母島村民会館の IBO 佐々木です。講演について、また活動について質問などある方はどうぞ。ここからは意見交換の時間としたいのでビデオ&マイクをオンに、質問のある方はミュートをはずしてご発言ください。

天谷（事務局）：ヤンバルクイナを観る施設ができたのはすばらしいが、環境省が予算や人を出したのか、地元自治体か、誰が作ったのか。

長嶺：沖縄の一番北にある国頭村という村が造った。ヤンバルクイナの所有権は環境省が持っていて、きちんとガイドラインを作り、飼育下繁殖した個体からストレスを感じない個体を選んで村に提供する。ヤンバルクイナの施設は環境省が作って、村に委託する。予算は村が担うが、指定管理者は地元の集落が作った NPO。四者で予算は村、中の管理は NPO、施設は有料。施設は実は業者ではなく、地元の人たちが「自分たちがヤンバルクイナの生息地を再現する」ということで造った。

宮城雅司（母島在住、東京都鳥獣保護管理推進員）：

お話に「愛」とあったが、絶滅回避を皆がどうやって他人事ではなく自分事にしていったのか。

長嶺：沖縄に限ったことではないのではないかと。山奥のヤンバルクイナでは起きなかったかもしれない。たまたま、ヤンバルクイナがこの集落で見られるようになったから守ろうという話になった。お年寄りの時代は集落には森がなく畑しかなかったため見ようが無かった。森林施業がなくなり森が戻ってきたときに見られた。集落で見られるようになったときに愛着をもってくれた。それは、遺伝子が大事とかいう見方ではない。

天谷：絶滅の渦についての図があった。オガサワラカワラヒワを増やしていかないといけないと思うが、どのくらいの数が要るのか基準や目標があれば教えてほしい。

長嶺：専門分野ではないが、個体群が残っているうちに始めなければならない。数十羽から始めては間に合わない。ざっくりだが、オガサワラカワラヒワはまだいる。トキのレベルにはなっていないのではないかと。遺伝子の多様性を残した個体群を残したい。遺伝子の解析を始めている方もいたが、間に合わなかったら仕方が無い。個体群がどんどん小さくなっていくわけだから、遺伝子タイプなどを調べてペアリングをする。ただ野生動物のペアリングは難しく我々が思った通りにはいかず、時にはヤンバルクイナを騙してでも繁

殖させる。遺伝的に、血が濃くならないようにキープする。オガサワラカワラヒワもまずなんとか飼う、数を増やしていく、その次に多様性を考える。目標は失ってはいけないと思う。

天谷：オガサワラカワラヒワは、ヤンバルクイナとは体格や体質が全く違う小鳥だが、どういったところに注意したらよいのか。

長嶺：誰も飼育下繁殖をしたことがないので何とも言えないが一番近いのはフィンチで、枝に止まって種子を食べる。カナリアなどが近い。巨大でなくとも、小さくても安全な場所を作ってあげる。日本の和鳥を飼う技術は最高峰であり、それをもってきてやることができるのではないかと。

佐々木：活動を始めたとき、この集落でヤンバルクイナの存在は声も含めてほとんど知られていなかったのか。

長嶺：林業、農業、今はサラリーマンの人もいるが、むかし山の仕事をしていた人達は知っていた。林業の人たちは見えていた。ただ集落ではそこから始まる。決して古くから見られていたわけではない。だから勇気が出る。私たちの希望だった。

佐々木：アカガシラカラスバト WS 開催時、共生 WG に参加した方達はほとんどハトを見たことが無かった。今では、娘は団地の下で0歳のときからハトを見ている。当時は本当に少なかったが劇的に増加した。オガサワラカワラヒワはちょっと違う。

天谷：母島の高学年の子は結構見ている。先日たまたま脇浜へ散歩に行ったら「今日いたよ、見たよ！」と教えてくれる子もいた。

佐々木：会場の星さんから1996年の調査記録をいただいた（1996年9月の夕方4時半～5時半、母島評議平に出ているカワラヒワの観察記録）。ブリーフィングブックにはご本人の許可を得てぜひ掲載したい。属島に渡っていく個体が190羽、向島でなく妹島へ姉島へと行く個体が多かった。渡らない個体もいた。これは決してそんなに遠い昔ではない、なんとかここへ戻れないだろうか。もう一つ、今日の講演を聴いてどう思ったかアンケートに書いていただきたい。2問目に「あなたはカワラヒワの絶滅回避のために何ができますか？」という設問があるが、父島での回収が少なかったのでぜひ書いてほしい。アンケートの目的は、共生WGで「オガサワラカワラヒワを絶滅の危機におとめている島の課題は何か」を皆で書き出していき、そのウォーミングアップのために各々が考えていることを事前に共有したい。ブレインストーミングというか課題の抽出というのが趣旨。ぜひ



他の人が考えないようなことを。

磯部純子（父島在住、アカガシラカラスバトWS参加者、アホウドリ人工繁殖スタッフ）：  
人工孵化のときにうまくいかず最後に冷やしたらうまくいったと。どうやって発見されたのか。

長嶺：実は、病院には交通事故や犬・ネコに食われたヤンバルクイナの死体が次々運びこまれてくる。それを一つ一つ無駄にしないように活用している。それらを見ていて、ふつう鳥は繁殖期に抱卵斑が出るが、毛がいっぱい生えてて抱卵斑がなかった。フィールドの人たちにも聞いてみたけどよく判らない。これはもしやと考えた。ただスタンダードから離れて卵を温めて冷やすのはなかなか勇気が要る。私たちでなければもっと早く判ったかもしれないが、こう思っている。世の中に優秀な人はいっぱいいるが現場にいる人間しか結果が出せない、どんな人でも。正直あきらめている。その代わり、わからないところはプロに聞く。と、みんな親切に教えてくれた。それでも7年かかったが…生き物というのは本当にびっくりさせられる。

磯部：オガヒワを見たことのない人がたくさんいる。ハトのときも見たことのある人がほとんどいなかった。知ることから愛情も沸くし、守りたいという気持ちが出てくるので、アカガシラカラスバトという長い名前から「あかぼっぼ」という愛称をつけて「こんなにかわいいんだ」「こんなに綺麗な鳥なんだ」としていったように、オガサワラカワラヒワも特に父島での認知度を上げていったらいいと思う。

佐藤大悟（母島在住、教諭）：

まずは知ることが第一歩。そうできるように情報共有していくことなのかと思った。クラスの子ども達にとってもオガサワラカワラヒワは当たり前の存在だが、危機的な状況にあるということはまだ理解できていない。知る機会が無い。小中学校に環境教育プログラムは在るが教員の入れ替わりも多く、今回のような機会に専門家から新しい情報を得て学校のプログラムの中に取り入れていければいいと思う。みんながそれを知った中で、島民がちょっとした場でいいのでそれを話題にする。それぞれの立場で、それぞれの組織で「これならできる」という中で当事者意識が育っていくのかと思う。

安藤重行（父島在住、母島居住歴あり、元東京都鳥獣保護員）：

ヤンバルクイナで感染症は出っていたのか。島にも内地から何度もレースバトが飛んできていて中に1羽、口の中に大きな腫瘍があり獣医さんとメスを入れたら血が噴き出して、鶏用飼料をやったら1週間で治ったということがあった。

長嶺：現在は鳥インフルエンザといったこともあり気を遣っている。飼う段階、野生復帰させる際に国立感染症研究所に依頼して調べている。ウイルス性の病気は見極めが必要なので、域外保全のときに多々調べる必要がある。

鈴木（事務局）：感染症の問題はトップ3に入ってこなかったが、感染症WGで専門の先生方に別に議論していただいている。

坂入祐子（母島在住、元母島観光協会事務局長）：

とても感動した。以前よりもずっと進んでいて、かつ住民たちの情熱とモチベーションというものが強く感じられて、果たしてこの島でできるのかなと疑問に思いつつ、やらなきゃいけないんだという気持ちになった。住民を巻き込んでいくことは重要なことだが、オガサワラカワラヒワの絶滅を防ぐには、繁殖地が属島で、しかも減少原因がネズミだと解っているなら、全部できるかは疑問だがまずは属島でのネズミ駆除をやる。あとは島のノネコ対策。オガサワラカワラヒワは南の方と、中ノ平、評議平と集落で見られているので、そこでのノネコ対策に力を入れていくべきだと思う。これは住民だけの力ではとても無理なので、どうしても行政の力に頼りたい。その辺をどのように住民が要望していけるかも今後必要なことなのだと思う。もう一つ、飼育下繁殖が地元でできているということがすごい。スタートは掘っ建て小屋でも皆で力を合わせて作って、また保護の活動が大きいものになって、そこからいろいろ達成していくということは必要だと思っている。域外飼育というと必ず内地でやることになってしまう。そこで繁殖しても島に戻ってこられるかは非常に疑問。この島で元の状態に戻すというところに行ければ素晴らしい。そういうことについても考えていければと思う。

佐々木：アンケートに書かれた意見や皆さんの思いを一度事務局の方で集約してバックする。それらを見た上で向こう3年間で何が必要なのか、地域WGで話していけたらと考えている。

**SUMMARY**

Efforts in the Ogasawara Islands for the conservation of the Ogasawara  
Greenfinch

Yuri AMAGAI<sup>1\*</sup>, Rion MIYAZAWA<sup>2</sup> & Shogo ADACHI<sup>3</sup>

1. Hahajima junior high school, Motochi, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
  2. Fujitani Farm, Motochi, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
  3. Islands Care, Shizukazawa, Hahajima, Ogasawara, Tokyo 100-2211, Japan.
- \*liliumilktea@gmail.com (author for correspondence)

Following the Ogasawara Greenfinch PHVA workshop, coloring pictures of the Ogasawara Greenfinch were distributed to nursery school, elementary school, and junior high school in Hahajima Island. Panel displays about Ogasawara Greenfinch were held at the Oki port passenger lounge. Workshops for children were also held at elementary and junior high school. Through each of these events, we were able to raise awareness and interest in the Ogasawara Greenfinch both on and off the island.

**Key words**

Coloring pictures, Degree of recognition, Interest, Photographs, Workshops for children